

(研究部門)

自ら学び、考え、行動できる、たくましく生きる子どもの育成
～小中 9 年間を見通し、各教科の特質を生かした
主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～

大阪市立浪速小学校

1. 研究主題設定の理由

本校は施設一体型の小中一貫校であり、義務教育 9 年間を見据えた特色ある教育活動や 9 年間を見通した計画的かつ継続的な教育課程を編成することができる特色がある。その特色を生かし、小学校及び中学校の 9 年間を通じて、育成を目指す資質・能力を明確化し、その後の学びに円滑に接続させていくことが求められる。開校2年目より小中合同で道徳科について研究を進めてきた。道徳科の9年間の繋がりや指導方法の研究をすることができたが、他教科への広がりがなかった。各教科での9年間のカリキュラムマネジメントが必要であることから、全教科での「主体的で対話的で深い学び」の研究を進めることにした。

2. 研究の趣旨

日本橋小中一貫校がめざす子ども像は「3つのW」、思考「正しい判断ができる子」、健康「いつも明るく元気な子」、実行「強い意志で行動できる子」と設定されており、学校教育目標を「自ら学び、考え、行動できる、たくましく生きる子どもの育成」として、日々の教育活動を展開している。

この小中一貫校としての目標を達成するために、各教科の学習の特質を生かした主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、昨年度より研究を進めてきた。昨年度は A 国語・生活、B 社会・音楽、C 算数・数学・技術・家庭、D 理科・体育、E 外国語・図工・美術・道徳の5つの教科チームをつくり、国語・数学・社会・体育・外国語の五教科について研究討議を進めてきた。

成果としては、小中連携して研究を進める中で 9 年間の指導の系統性を意識した授業を試行し、課題解決を個人、ペア・グループ、個人という流れで学習を進めることで、児童は対話を通して思考を整理することができ、個人で課題を解決できるようになるという学習形態を確立することができたことが挙げられる。課題としては複数の教科でチームを作ってしまう教科の特性を生かした学習に迫りにくかった。これらの課題を改善するために今年は10教科に分かれて研究を進め、より教科の特質に迫った授業を小中合同で進めることにした。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を次のように設定し、小学校・中学校で 10 教科のチームに分かれ、チームリーダーを主として研究を進めた。

視点① 主体的に学習に取り組むためにどのような工夫をするか

学ぶことに興味や関心を持ち、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげることができる学習活動。

視点② 対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりするためにどのような活動をするか

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めることができる学習活動。

視点③ 教科ならではの物事の捉え方や考え方をどのように働かせるのか

各教科等の「見方・考え方」（どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか）を自在に働かせながら、知識を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考え

を形成したりする学習活動。また、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることができる学習活動。

視点の①～③の成果・課題について、KJ法を用いて小中合同のグループで討議し、全体で交流後、指導講評を受けた。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

研究テーマを「自ら学び、考え、行動できる、たくましく生きる子どもの育成～小中 9 年間を見通し、各教科の特質を生かした主体的・対話的で深い学びの実現を目指して～」として研究に取り組んできた結果、成果として以下のことがあげられる。

○主体的に学習に取り組むためにどのような工夫をしたか

- ・ 題材や教材の工夫をしたことで、児童の経験・体験からの意見や考え、既習事項から学んだことを引き出すことができた。
- ・ 作戦カード、ヒントカード、役割演技、キーワード、ICT 機器など、児童の実態に応じた児童の手助けとなる手立てを指導者が用意することで、児童が主体的に取り組むことができた。

○対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりするためにどのような活動をしたか

- ・ 自分の考えをより深めるために、一度自分の考えをまとめてから対話活動を行った。その後、改めて自分の考えを書き出したり、発表したりすることで、他者と自分の違いに気付いたり、新しい考えが浮かんだりすることができ、より深い学びへとつなげることができた。
- ・ 自分の考えを書いたり伝えたりするのが苦手な児童も、友だちの意見を聞くことで、自分の考えを書いたり伝えたりすることができた。

○教科ならではの物事の捉え方や考え方をどのように働かせたか

- ・ どの学年も話し合いや、試合のゲーム、実験の結果などを比べたり振り返ったりする時間を設けることで、教科ならではの物事の捉え方や考え方を働かせることができた。

○上記の 3 つ視点以外の成果

- ・ どの学年も、教材や児童の実態に応じて、作戦タイム・役割演技・役割分担・ペアトーク・グループトーク等を設けたので児童の意見が出やすい教育場面の設定をすることができた。
- ・ 小中一貫校として小学校と中学校で共に研究を進めていく中で、情報交換を密にし、一貫した指導を行うことで日々の授業力向上につなげることができた。
- ・ 指導案検討会や討議会を小・中合同で行うことで、9 年間を見通した学習計画を立てて、それぞれの学年で到達していく目標を明確に決めていくことができ、児童生徒の教育へ活かすことができた。

(2) 今後の課題

- ・ 「教科ならではの物事の捉え方」を指導者が理解し、児童が授業の中で考え方をさらに働かせることができる発問の工夫をすること。
- ・ 児童がただ答えを伝え合うだけにならないよう、自分の考えをしっかりとち、根拠をもとに話すことができる場面の設定を行うこと。